
この空が灰色に染まる頃（仮）

蒼 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この空が灰色に染まる頃（仮）

【Nコード】

N3305BA

【作者名】

蒼 奏

【あらすじ】

魔族と対峙する神軍。交戦が収まらない一方で、裏切り者の魔の手がパンドラへと近づく。

嘘と裏切り。敬愛と深愛。葛藤の中、それぞれの想いは揺れる。

？

きつと、この容姿が皆と同じであつたなら、私の歩む道は全く別のものになつていたのだらう。この姿ゆえ、私の進む道先には、鋭い切っ先で待ち構える棘の歓迎があつた。我先に絡めとろうと伸ばされる蔓に捕まり、洗礼を受けるべく光の外へ投げ込まれた。そこは、まさに猛獣の檻。飢えた獣が牙を向き唸る中へ、力ない私は投げ込まれたのだ。

空には灼熱の太陽。大地を照らす昼の主は、上機嫌で容赦なく地を炙る。乾いた空氣に熱を帯びた風。砂塵は舞い踊り、微粒子が隙間を狙う。果てしなく続く砂漠の大地は、主が代われればその顔をも変える。肌が焼け付くほどの暑さを吹き飛ばし、鳥肌を浮かせる程に冷え込み、吐息さえ白くする。過酷な場所に身を置く砂漠の民アムル。

民は砂漠を歩き村や町を渡った。行く先々で歌や舞を披露しては金貨を得る。魅力的な声と容姿はその為のもの。こうして稼いだ金貨のほとんどが、水や食料、荷を運ぶかけがえのない家族へと消える。直接の礼は言えずとも、背の瘤こぶにくぐられた大きな荷物を平然と背負い、力強く四肢を進める。

流浪の民。斯様な場所には勿体ない美しさ。皆一様に肌は浅黒く、長く伸びた髪は月光を盗んだような見事な銀。強い眼光を宿した瞳は琥珀に煌く。男性でさえ、同様に美麗であつた。多種族の混血を嫌うのは、その容姿を守るからだらう。母も、例外なく綺麗なアムルの民だ。それに比べ 私の肌は色素が抜け出た白。波打つ髪には金を溶け込ませ、しなやかに揺れる。そして、水を入れた銀の器に映りこんだ瞳は深紅。燃え盛る炎でさえ嫉妬する、血を垂らしたような鮮やかな赤。こんな色を宿しているばかりに、私は民として歩む道を剥奪されたのだ。

奴隷のような毎日。手枷と足枷が、常にまとわりつき肌に血を滲ませる。

まるで、異物。

批難の聲が日々浴びせられた。魔物、悪魔、不幸を呼ぶ者だと。幼い頃は理解出来なかったが、物心ついた時より私の中で確信が生まれた。私は、魔の者。この世に必要な無い、忌まれる生き物なのだ。

生き地獄。

しぶとく動き続ける、この鼓動が恨めしい。いつそ、短剣を盗んで首を掻つ切ろうか。ここにしがみつく理由など私には無く、私が消えても喜ぶ者しか居ない。

私は常に死を渴望した。

意味なく朝が訪れ、夜が訪れる。耐えられるであろうか　暗闇の世界、この先も、この状態が続く事に。そう、思えば思うほど、死に囚われる。逃れられるなら、たとえ手を差しのべる相手が命を狩る者だとしても、私は笑って迎え入れるだろう。

そう。たとえ、魔の者であろうと私は構わない。この、ちっぽけな器から出してくれるなら。

願っていた。どうか、安らぎをと。そんなある日。

私は初めて、枷から解放された。

掟だから。

長はそう言つて容赦なく　私を売った。

狭い錆び付いた檻。舐めく（ひしめく）子供。此処がどういう場所かは理解出来た。減つては、またどこから増える。売買される子供達を、何度もこの目で見てきたから。

小太りの大人達。汚い言葉。蔑んだ瞳。舐めるように檻の中を物色し、交渉する。だが、いつまで経ってもお呼びがかからない。大人達は奇怪な目で私を見ては、魔族だと言い捨てる。気味悪そうにその度に売り手の男は弁解するが、私が買われる事は無かった。こ

うも売り物にもならない私など、いずれ処分されるのだろうが、それでもいい。元より生きることには未練など無い。

そして、また今日も私に買い手が付く事は無かった。力づくで無理矢理に連れていかれるのは、まだ小さな女の子。泣き叫ぶ子を何も言わずに見送る。あの子の行先、待っているのは地獄と変わらぬ日常だろう。私達を生かすも殺すも権限は薄汚れた奴等にある。

泣いても何も変わらない。知っている。私には、あの子達のように涙を流す事は出来ない。それに、涙とはどう流れるのか。どんな感情の時に生み出されるのかさえ忘れてしまった。

男は頃合を見て檻に布をかける準備をし始める。すっかりと覆い、私には月の一筋の光でさえも与えてはくれない。

もつすぐ 暗闇が訪れる。いつもの様に

「 少し、見せてくれないか? 」

「 ん? 悪いが、今日はもう仕舞いだ。明日にしてくれ 」

「 そうか…… 人身売買は法により禁止されている。知っているね? 」

「 ちっ 何だよ、お前さん。どこの国の者だい? 大体、それどこの法だよ。これはなあ保護してやっているんだ。身寄りのない哀れなガキ共をなっ。売買なんて 証拠もないのに言っちゃあいけねえ。まあ、仮に売買してもだなあ、ここはアントだ。法なんてない無法地帯に、お前さんの言う違反なんてのは通用しねえ。それと一個教えとくぜ。ここでは 人殺したって罪には問われないんだよ――! 」

男は腰から剣を抜き素早く振りつけたが、刃は掠りもしなかった。

「 …… ふんっ。ちったーやるじゃねえか 」

「 剣を振るうという事は、応戦してもいいんだね。貴方を殺めて(あやめて)も誰も文句は言わないし。そういう事だろう? 」

漆黒のマントを纏う者は静かにそう言い放つと、ゆっくりと手袋をはめた右手を前に出す。すると、その手に炎が現れ揺らめき、形を成す。摩訶不思議。男の手には剣が握られていた。月夜に浮かぶ、

赤にもオレンジにも見える剣は、透明で炎のようにゆらゆらと色が変わる。火がただ剣に形をなしただけに見えた。

「……嘘だろ……なっ、お前、まさか」

「その、まさか。残念だが、先に刃を向けたのは貴方の方だ」

マントの男は炎の剣を突き立てた。あっけなく地に倒れた男は自らの血の溜に、身を沈めた。

人を殺めたばかりの漆黒の者。剣を空でひと振りし、付いた鮮血を飛ばす。その後、悠々と檻へと近づき、剣で格子を斬り壊す。震え怯える子供達を一通り見渡した後、その視線は私とぶつかり合ったまま止まる。じっと、目を逸らさず見つめる憂いた瞳。何か物言いたげであったが、一度そっと閉じる。ほんの瞬きの後、その者はマントを外し、素顔を晒した。

月光を背後に、その姿は眩しく映る。

色白で端整な美しい顔、黒々とした艶めく髪が風に揺れる。左右非対称の瞳には、太陽と夕日を宿している。綺麗だが、どこか悲しそう。

男をただ眺めていた。その間に、その者は私の前で片膝をつき、どうという訳か深々と頭を下げた。

「お迎えに上がりました 王」

それだけ言くと、檻の中から軽々と私を抱き上げる。

何かなんだか解らない。

訪れる筈だった暗闇は、眩しい炎に姿を変え私を連れ去った。

？

空は曇天。今にも雨が降りそうな分厚い雲は、光の差す隙間もない。色濃い灰色は陽を拒み、“夜など明けぬ”と唸りをあげる。圧迫感と雷鳴に鼓動は早まり、人々は足早で家路を急ぐ。だが、彼女はその波を逃した。人一倍大きな体は身軽な人の倍の時間を有した。勿論、彼女なりに急いで歩いてはいる。でも、大きな体は坂を登りきる途中で歩みは一度止まった。買い物かごを手にしたまま、前かがみになり大きく息をする。

その時　稲妻と轟音が空を駆けた。

胸を抉られたかと思うほどに、雷鳴は彼女の耳に響き驚いた。咄嗟に耳と目を塞ぎ、買い物かごを落とした事にさえ気づかない。

雷は嫌い？　お嬢さん。

そこへ突然見知らぬ声が響く。慌てて辺りを見回すが、人の姿は見当たらない。

まあ、それはどーでもいいや。それより　ねえ“シンシア”って子、明日結婚するんだってね。だ・か・ら・憎くて、憎くて、しようがないーみたいな？

「な、何を　」

声は彼女の脳に言葉を送り込む。蓋をしていた気持ち呼び起こし、刺激し始める。

あははっ。驚いちゃって可愛いな。でも僕知ってるんだ。醜い、醜い、醜ーい肉の塊みたいな自分より、彼が痩せてて綺麗な彼女を選んだからだよね。可哀想なアデル。結婚式には、どんな顔して行くの？　やっぱ、月並みに“おめでとう”なーんて言っちゃうのかなあ。君が誰よりも愛してる彼と、あんなに信じてた親友。二人の幸せを見せつけられてさ

「　やめてっ！　！」

頭に響く真実を告げる声。彼女は耐え切れず耳を塞いでしゃがみ

こむ。唇を噛み締め、涙を浮かべながら。

やめて……そんなのは分かっている。私じゃ駄目な事くらい。でも、まさか彼女と一緒にになるなんて 信じたくない。信じたくない

「泣かないで、アデル。僕が君の願いを叶えてあげるよ」

悪魔は囁いた。

顔を上げれば美しい微笑みと漆黒の金縛り。捕らえられた彼女はもう、逃げられない。

「明日の結婚式、彼は君と結婚すんだ」

「……私と？」

「そう、アデル。君とだよ。でも、その代わり

果实は甘い。

禁断だからこそ、甘い。

けれど。

甘すぎて反吐が出る。

遂に降りだした雨に打たれ、彼女は不気味に笑った。

式の当日。

祝福の声は悲鳴へと変わった。神聖なる誓いは交わされず、純白の婚礼衣装は深紅の血に染まる。

「ごめんねー。こうしないと、ご主人様の気がどうしても収まらなくてさっ」

小柄な青年の右手に握られているのは、持ち手の長い巨大な鎌。湾曲する鋭い尖端からは鮮血が滴り落ちている。餌食となった、シンシアの血で汚れた鎌は、その後も次々と建物の破壊を行う。

天井に穴を空けて押し入る大胆な魔族の登場により、人々は混乱し入口より急ぎ逃げ去って行った。人を殺めるに慣れているにも関

わらず、去る者を追いかけはしない。むしろ、居る者さえ居ればいい。そう言いたげな行動をとった。

「ちよつとちよつと。神父さんは居てもらわないと、困るんだな。これから本当の結婚式を挙げるんだから」

魔族の青年はにつこりと微笑み、大鎌を這いつくばる神父の喉元に当てた。

「お、おまえ」

「僕の事、知ってるって顔だね。お察しの通りだよ」

無論、魔族についてなら詳しい方。だから知っている。大鎌を振るう魔族は二体。そのうちの一体が、今日の前に。神父の顔から血の気が一気に引く。

「ほら、早く立って。新婦の入場だよ」

青年は武器でもって神父と新郎を定位置へと誘導し、自分は後ろにある長椅子へと座る。するとタイミング良くオルガンが勝手に鳴り出し、入場に華を添えた。暫くして、誰かがゆつくりと入ってくる。それは、純白の花嫁であり、ヴェールの下の正体はアデルだ。腫れぼったい一重の目、薄い唇、そばかすだらけの顔、肥えた体。虚ろな瞳に薄ら笑いを浮かべ、一歩ずつ前へと進む。

「うわーアデル、すっごい綺麗だよ」

青年は無邪気に拍手を送る。ばたばたと両足を世話しなく動かし、満足そうに満面の笑み。彼女は青年に軽く礼をすると、目の前に転がる親友の骸を見向きもせず踏み越えて行った。

「あはははっ 最高だよ！！ あんなに君の事心配してくれた親友を、ゴミのように踏みつけるなんてさっ。本当、傑作だね」

狂い笑いが響く。

「た、助けてくれ」

新郎は魔族への恐怖から震え失禁。まんまと隣に立つアデルを直視出来ないまま、小さな声で神に祈りを捧げ始める。

「無駄だよお兄さん。祈ったって、だーれも来やしないさ。それに僕、アデルと契約してるの。あんたと結婚させてあげるってね。馬

鹿だよね、誰がどう見たってあんたとアデルじゃ釣り合わない。なのに、愛してるんだって、あんたの事。この女の婚約者だって紹介されてもさ、アデルは未練がましくあんたを想い続けていた。ただの顔見知り程度だったのにね。でも、良かったんじゃない？ シンシア、他に本命の男いたみたいだし。あんた金持ちだし、縁談断れなくて仕方なくって言うていたから　おっと危ない。僕ってばお喋り。ほらー早く誓いなよ。永遠に君を愛しているってね」

「　う、嘘だ、そんな、嘘だろ……」

「あーあ……もう、神父さん、早くー」

「魔族と契約するなど、なんて愚かな　」

「早くやれって言うてんの」

冷やかな声と同時に大鎌の刃が神父の頬をかすめる。青年の瞳から遊び心が、一瞬にして消えたのを見た。

深い深淵に立ち、奈落に突き落とされる間際の恐ろしさ。引きずり込む様、下で待ち受ける闇に怯え、　神父は言われるまま婚儀を行う。

真偽の解らぬまま、男は震える唇を押し当てただけの、誓いの口づけを交わす。

ただうつとりと新郎を見つめるアデルとは反対に、結婚する筈だった女の不貞を知らされ混乱に陥った男。誓いの後も、掻き乱された心は落ち着かない。

「……そんな、シンシアが、そんな　」

「そんなに気になるなら、直接聞きに逝きなよ」

「え？」

青年の声が背後から聞こえた。振り向く間もなく、男は自分の胸元から腕が出ているのを見た。

その血まみれの手の中で微かに一度、動きを見せる切り離された

臓器

「アデル結婚おめでとう。これ、僕からの贈り物だよ。彼の愛しているが、沢山詰まっているよ。素敵でしょう？」

まだ生暖かな心を胸にするアデル。喜ぶ彼女の目の前で、男は倒れた。

「……惨い事を」

「褒め言葉どーも。さ、無事に彼と結婚出来たんだ。次は君が約束を守る番だ」

青年はアデルに近づく。

魔族との契約　それは願いを一つ叶えるのと引き換えに、自らの魂を渡す事。今こうして彼女の願いは叶えられた。だから、今度は彼女が青年に魂を渡す番。

既に、正気ではないアデル。床に座り込み、空虚な瞳は何も映さず、愛しい男の心臓を抱いたまま闇を見ている。

「じゃーね、アデル。永遠にサヨナラだ」

青年は別れの挨拶を済ませ、アデルの胸に手を入れ魂を引きずり出す。無理矢理に離された魂は鈍い光を帯びた小さな球体で、それを口へ放り込むと、甘い果実は乾いた全身に行き渡り渴きが癒される。

「まあまあだな。あーあ終わっちゃった。これじゃ退屈しのぎにもなりやしない。つと、じゃーね、神父さん。お仕事ご苦労様」

不幸な骸を軽く飛び越えると、青年は天井へ両手を突き上げ体を伸ばす。次いで左右に首を傾け肩を回す。露となっている太股に付いた血を拭い、大鎌の柄を肩にかけるように持ち、入口に向かって歩き出す。

開いたままの扉から外へ出るとすぐ、気づいた。

「何か用？」

「神軍が来る。それだけだよ」

「どっちを殺りに？」

「勿論、君」

「だよー」

切れた会話をどちらも繋げようとはしない。途切れた間を全く気にせず、青年はまた歩き始めた。芝生の上を真っ直ぐ町の方角へ。

数歩歩いた後、忽然とその姿は消えた。気配がしない。今の今まで青年の居た先を見据え、男はふっと口角を上げる。そして、迫り来る光の足音に耳を傾けた。

「水の波動　キリトか」

小高い丘に建つ小さな教会。魔族の出現により、すっかり人氣が消えたその場所に、美しい男は一人静かに立つ。高い身長。緩く首元を開けたシャツに長い薄手のジャケット。簡単な服装だが、ただ立っているだけで吸い寄せられる魅力がある。漆黒の髪も栗色の瞳も、そして　闇色に染まった六枚の翼も。どれをとっても完璧で、闇が男に懷いているようだ。

現れた黒き羽は、重力に逆らう力を男に与えた。体は大地を離れ、ゆっくりと空へ溶け込むと、やがてその姿は青年同様、忽然と消えた。

その僅か数分後。彼が到着した頃には、全てが終わっていた。

残された骸には屍に群がる習性のある、無数の黒死蝶が我先にと群がっている。

「お前が遅いからだ。っていう苦情は受け付けませんよ」

「お前が遅いからだ」

「って、キリト。言ったそばからそれかよ。ボク神獣だよ？　脚には自信があるつもりだけど？」

「分かっているって。だが、遅かったのは確かだ」

「うー。もっと早く言ってくれればな」

「それはあるが。弁解なんてものは俺等の言い訳に過ぎない」

「そりゃ、そうだけど」

「それにしても……酷いな」

目を覆いたくなる光景が、嫌でも視界に入る。破壊された内部。椅子も窓もぐちゃぐちゃで、破片があちこちに飛び散っている。そして、二人の花嫁と新郎の遺体。ここで何があったのか。状況からして、まず報告通りで間違いない。

キリトは黒い手袋をしたまま、片手で軽く頭を押さえる。骸を前

に動揺を見せない彼は、こういう光景を何度も目にして来ている。それが専門で、その為に組織された所に所属しているのだから。証拠に、彼が纏っているのは黒い軍服だ。腕章にはローゼリア国は神軍を示す翼のアラベスク紋章の刺繍。更に、彼だけが長い黒のコートを着ている。それは指揮官である証。指揮官としての経歴は長く、見た目の若さからは、年月を聞いて驚かない者は居ない。絵画から抜け出たような容姿は、実年齢を拒否する程に若く綺麗だからだ。うねる銀髪にやや垂れ目な金と藍のオッドアイ。珍しい髪色と目の色が、彼が地人^{ちじん}で無い事を現している。地人とは歳の流れが違う彼の着なれた軍服の左胸には、グリフォンと車輪の紋章を型どった銀のバッジが輝いている。

「なあ。これってやつぱり？」

「ああ　魔族だ。ロイド」

「はい」

「遺体の埋葬の方を頼む。俺は神父さんに詳しい話を訊く。それと、辺りの浄化も忘れずな」

「了解しました」

部下に指示を与えると、キリトは一旦外に出た。そこで、一部始終目撃していた唯一の人物から、殺戮者の名を聞く。

フェレス。

若い青年は貴族級。魔族の中でも突飛な力と頭脳を持つ者。その中の一体。赤黒の髪、闇色の瞳、闇色の心。言葉巧みに獲物を捕まえては、その魂を喰らう。武器は大鎌。邪気のある子供の様な印象を強く与えたかと思えば、大口を開けた闇を覗かせる。飄々とした態度でありながら、狂気。

神父はその名を告げ、続ける。

「私のような老いばれなど、わざわざ自らが手を下さなくても……」
と思ったのかは知れぬが、こ度の事で町は混乱するでしょう」

重くのし掛かる責務。

「はい、承知しております。貴重な証言ありがとうございます。」

では、教総会までお送りします」

「ああ 頼むよ」

仕事を終えた軍の一行は初老近い神父を連れ、教総会の心臓である、ある建物へ向かった。

馬で半日以上はかかる距離を、神獣は一時間で走り抜けた。その速さは目を見張るものがあるが、それより雲にでも乗っている感覚に、神父はただただ驚いた。

小さな町を抜け森を突っ切る。続いて広野を真っ直ぐ進み、大陸を跨ぐ広い川を飛び越えると、また暫く広野の大地の先に、無機質な塊が見え始める。それが、教総会のある都市シユラク。

小規模ながら鉄壁に囲まれたその場所は、何かを護る様に他人を拒む。鉛色の城の内部に続く門は固く閉ざされたまま、軍が近づいても開く気配がない。

だが、キリトは冷静だった。そのまま近づき、城門に向かって言葉を発する。

「ケルビム指揮官キリト」ライオルだ。教士官の方をお連れした。開けていただきたい」

聞き届いた筈の声に、ぴくりともしない門。妙に静かな時が過ぎる。

なあ、上から入ればいいんじゃないのか？

「それは無理だ。壁全域と上空には結界が張つてある。つまり、向こうから歓迎してもらわないと、中には入れない」

ふうん。王宮以外にもあるんだな。勝手に出入り出来ない場所って。

キリトを乗せる騎乗形の神獣は、藍色の首をしなやかに垂れる。前肢の蹄で大地を軽く掻き、大人しく待った。

空は鮮やかな橙を帯び始めた。返答の無いまま数十分が過ぎ、壁の向こう側に人の気配。そして、ようやくその固い鎧を外す城門。ゆっくりと 重い扉は開かれる。

扉の向こうには、白いローブを着た教士官が二人立っていた。両

脇から無表情のまま、一行が入るのを見届ける。その後、直ぐに閉ざされた門に、歓迎というより収容に近い感覚を覚える。だが、見渡せば要塞のような外観からは創造も出来ない程、内部は明るく、そしてキリトを除く者は皆目を見張る。

一つの大きな円を描く室内に入り込んだまま、その場から身動き出来ない理由は、都市と呼ばれる由縁が理解出来なかったから。

家も道路も何も無い。あるのは壁一面均等に並んだ扉だけ。

「では、確かに送り届けました」

「ありがとうございます」

神獣の背を降りた神父は、軍に向かい深く一礼をすると、その一つの扉を開け行ってしまった。

ここ、どうなっているんだ？

「さーな」

嘘だあ。全然驚かないし、来たことあるんだろー。

「んーどうだろ」

ずりいよな……都合が悪くなると、いつもそーやって隠すんだからさっ。

「それでは、ご苦勞様でした。門を開けますので、ご帰還願います」
拗ねる神獣の耳がピクリと動く。物言いは丁寧だが“帰れ”と言われては、気分が良くない。

「分かりました」

それでも指揮官は動じず、言われるがまま再び外の世界へと出る。

感じわりいの。

ピタリと閉じた鉄の塊に向かい、神獣は本音を言い捨てた。

「ロイド」

「はい」

「皆を連れて先に戻ってくれ。俺は、これから報告に向かう。レンシアにもそう伝えてくれればいい」

「了解しました」

指示を受けた配下五名は、速やかに神獣の方向を変え、ローゼリ

ア国は王都東方都市ルアンへ駆ける。

「さっさと行くぞ、メア」

後ろ姿を遥遠くに見届けた後。キリトは機嫌の悪いメアを、手綱でもって進路に誘導する。

荒くつても文句言うなよ。

「はいはい。陽が落ちる前に戻れたらな」

……余裕だつてば。

鼻息を鳴らし、前肢を持ち上げしなやかに体軀を反らす。その勢いで駆け出したメア。絹糸のような毛が揺れ、姿は王都中央都市ブランシェリードを目指した。

深淵の森を何事もなく無事に通り越し、距離にして丁度半分まで来た頃。自慢の脚力であつてもシユラクから王都は遠く、メアの息遣いに変化がみられる。

「へばったか？」

うるさいっ黙つて。

強がるメアに、キリトはそれ以上何も言うことはなかった。ただ軽く笑むと、一切を任せた。相手を信用しているからこそその態度でメアもそれに応えた。

意地でもって速度を上げ、電光石火の如く大地を駆ける。一重にそれが自分の役目だからこそ。

日暮れ前。なんとかローゼリア国王都中央都市ブランシェリードにたどり着いた。王宮のある都市だけに、その出入りには厳しい尋問が待ち受ける。しかし、彼は時間をかけることなく、すんなりと中へ入り込んだ。

都市全体は瞬く白亜で構成されていた。地面も低く無作為に並ぶ建物も、勿論奥に構える王宮も。純白がただただ眩しく、むせる濃厚な薔薇の香りがキリト達を出迎える。白に映える赤は年中咲き乱れ、香りが絶つことはない。ここを訪れるたび絡み付く甘さだけが、汚れた狂乱を知らない。そう、心底思う。

荒い息づかいのメアが、汚れの報告に来たキリトを、目的の場所

の前まで連れてくる。彼が、その背を降りたと同時に人形へと変化。地面に座り込んでキリトを見上げる。

「……ご、ごゆっくり」

「すぐ戻ってくる」

「つつ　鬼っ」

休む時間を要求するメアだったが、あっさり却下された。疲れをもろに表に出すメアへふつと笑み、キリトはセラフイム指揮官の居る建物の門番へ、自身の名を告げた。こちらでは、待っていたかのように扉は直ぐに開く。

王宮とは目と鼻の先にある、この建物。中に入る前。ふと横を向けば、無垢な宮殿が輝かしく目に映り込んだ。視界から王宮を外し、颯爽と歩き出すキリト。

黙っていれば凜々しいその姿に、階級が上である熾天使軍の者であつても素早く道を譲った。軍に身を置く者、階級には厳しく上には絶対の服従。その彼等が自ら身を引く行為だけで、キリトの立場の重要性が伺えた。中には彼に向かい深く頭を下げるものまでいたが、彼自身には好ましい行動ではなく、表情は固いものだった。

羨望の眼差しもキリトにとっては、ただ　鬱陶しいだけ。だから、ここへ望んで来ることはない。こうして、用事のない限り。

回路を抜け一つの部屋の前。躊躇うことなく扉を二回軽くノック。軽い口調で「失礼しまーす」と声をかけ、堂々と中へ入る。

真っ先に射光が瞳を攻撃し、キリトはしかめっ面になる。背後からその光を受け止める“彼”は、立ち上がるとそつと薄手のカーテンで窓を覆い、次いで口を開く。

「早かったね」

椅子へ座り直し、青年は物腰柔らかな対応をとる。

「まーな。俺だつてやれば出来るって」

「そう？　待たせている神獣のおかげでしょ？　彼は君の為に良く頑張っているから。　そうだな。毎回やる気を持って軍議に出てくれると助かるが。ケルビムの指揮官様は、何かと仮病で休むから」

声音は穏やかだが、言葉には棘がある。

本当の事を改めて言われると、自然と大きくため息を吐きが出る。キリトは彼の前に置かれた柔らかなソファ―へ脱力感たっぷりに腰を掛けた。

「だってー駄目なんだよ、あーゆー難いの」

「駄目でも出て」

「えー嫌だ。苦手なんだって。あーゆう重苦しいの」

「出ないから、余計に重い空気になるんじゃない？」

「あー……まあ、それはごもつともなんだが」

キリトは苦笑いを浮かべる。

「報告、しに来たんだろ？」

これ以上この話しても、出て・嫌だの悪循環になるのは目に見えていた。彼の鮮やかな沈む太陽と昇る太陽の瞳をキリトへ向け、その話題に触れる。突き刺さるほど真っ直ぐなオレンジと金色の目。最悪の結果に、顔を伏せて話す。

「着いた時には終わっていた」

「そう。間に合わなかったんだね」

「ああ……」

「それで？」

その魔族は？ そう彼の言わんとすることを察知したキリトは、その名前を口にする。

「フェレスだ」

「そうか」

聞き覚えのある名前だ。最近、特に多く耳にする。

「まーあちこちで地人を喰ってるらしいが、すばしっこい奴だ。ここに情報が入るのは、被害が起きてからだ。どんだけ急いで神獣飛ばした所で、間に合わない」

「それは承知の上。相手が魔族である以上、要請には応えなければならぬ」

「分かっているが……」

どうにかならないか。喉元まででかかった言葉をキリトは飲み込んだ。

「それで、シユラクに寄ったの？」

「まあ、送り届けにね」

「トワには？」

「……会えるわけがないだろ？」

「そっか。日頃の行いが悪いからじゃない？」

二回目の咎めに口元が緩む。

「ちげーし」

「うん。分かっている」

「意地悪いな……」

微笑む彼に、キリトもふっと軽く笑んだ。

その後も軽いやり取りをし、キリトは部屋を後とする。入口で休む疲労困憊の神獣の所へ戻り、無理を承知で帰路を走らせた。そう遠くはないとはいえ、ルアンの邸に到着と同時にメアは地面に倒れ込む。出迎えに応じた副官の手を借り、キリトは人形ひとがたの彼を支え敷地の中へと連れていった。

時刻は一日を締めくくる為、着実に進んでいる。陽はとうに沈み、月の目覚め。

闇に乗じて影が動く。降り下ろされる刃は血を求めた。苛立ちをぶつけるように命は刈られ、小さな村は恐怖にひれ伏す。

「た、助けてくれ……」

無意識に十字架を握り締め、這いつくばり背を向け逃げようとす

る。

「それ、誰に向かって言ってるわけ？」

獲物の背中を踏みつけると、小さく苦痛の声を漏らした。

「ねえ、訊いてるんだけど。誰に助けて欲しいのさ」

冷気が漂う視線。

「……………こんな事　神軍がつ」

言い終える前。言葉を吐き出せない様、足に力を込める。

「笑える。神軍、神軍つて、バカの一つ覚えだよ。解ってる？」

あんた今殺される所なんだよ？　それを来もしない神軍に助けを求めるんだ。こんな状況で、何を信じるっていうのさ？　祈りや願いが通じているんだったら、あんたは助かる筈だよ。でも、違う。

あんたは、ただの犠牲者に過ぎないんだ。他の奴等が、生きて幸せを感じられる様にね。想像してみなよ　今あんたがこうしている間にさ、笑いあっている人がいるんだ。こんな事が起きているって、知りもせずにな」

上から降る声に、獲物は大地を両手で掴む。

「くつ　あはは？。悔しいかい？　惨めに死んで逝くのが」

高らかな笑いと共に、刃は拳を貫く。

「ぐうあ」

右手を貫通する刃。鎌の先端は、確実に土の中にめり込んでいる。痛みと恐怖が沸き上がり、体が尋常じゃなく震える。

「哀れだよ、本当。　ねえ、助けてくださいって言うてみなよ。神軍ではなく、僕にね。あんたの命を握っているのが、まだ誰か解らないわけじゃないでしょ？　熱心な神派が、地面這いつくばって、魔に懇願するんだ　考えただけでゾクゾクするよ」

歪んだ笑みで、魔の者は刃を軽々と持ち上げる。そのまま、獲物の体勢を足で仰向けに。

そこで、はつきりと顔を見る。月明かりに照らされた、漆黒の美を。刃が喉元に当てられてさえいなければ、間違いなく見とれる程に。

「そんなに物珍しいかい？」

「ぐつ」

胸を足蹴にする。

「ねえ…………どーするの？　死にたいなら今すぐこの首、かつきるけ

ど」

切っ先が、微かに肉に埋まり、血が流れる。

「た、助け……て」

死を目前とし、獲物の口が滑る。

「ほら。解ったでしょ？ 身をもって体験したんだから。人が屈するのは恐怖の前って事。ま、簡単すぎて、ちよつとつまらないけど。いいよ、僕は寛大だから助けてあげる」

圧する事を止め、魔の者達は自らの指の先端を噛みきり、流れ出した鮮血を獲物の口の中に垂らす。

「僕の為にいっぱい働いてもらうよ。今から、あんたは僕の下僕なんだから」

首に爪痕が残る。のたうち回り、獲物は人としての生涯を終えた。

ようこそ、闇の世界へ。

魔に堕ちた男に届くのは、主の声のみ。その声に命ぜられるがまま、逃げ惑う人を手にかけてゆく。さつきまで、同じ様に生きてきた者達を。

悲劇の光景を、屋根の上から眺める魔の者達。満足気に鼻唄混じり。闇ぎ紛れて現れた蝶が舞う姿に、誇らしげ。

「これはまた。殺りすぎなんと、ちゃいます？」

突然、隣に何者かの気配。

「何しに来たんだよ。僕の監視でも命令されたわけ？」

その者の出現に、魔の者はまた機嫌を損ねる。

「露骨やなあ。そない嫌わんでももしかして、憂さ晴らし？」

「だったら？」

「別に、なあんも」

「うそくさい」

「そつか？」

「当たり前。てか、目障りなんだけど」

「これは、えらい嫌われてしもたなー」

紳士の風貌の男は、立ったまま苦笑いを浮かべる。

「あまり派手に動くと、すぐ捕まってまうで」

注意を促す。

「馬鹿にしているの？」

「してへんよ」

「あんたの言い方、癪しやくにさわる」

「それは、すみませんなあ。訛りやし、簡単には抜けへんのですわ。堪忍」

鋭い棘のある言葉だが、男からは余裕が感じられる。

「僕は僕のやりたいようにする。そう伝えなよ。それと、派手に動かれて困るなら、僕を殺しに来いってのも。分かった？」

次々意図を見破り返答する相手に、男はクスリと口角を上げる。

「流石や 怖いなあフェレスさんは。名を馳せるだけありますな」
それで機嫌が良くなるとは、男も思っではいない。寧ろ、逆撫でに近く苛立ちは収まらない。

「うるさいなー。用事が済んだら、さっさと帰りなよ。ご主人様の所にさ」

「ノア様はご主人様とちやいますよ。飼われてるのとちごて、僕ら自らの意思で一緒に居てるだけや。そら、たまーにお願いされる事があるだけで」

「大差ないじゃん」

要は使われたんでしょ？ と云っている銀色の瞳が、振り向き男を射る。グサリと突き刺さる視線に、否定も肯定もせず話題を変える。

「前は“箱”が壊れてん。せやけど、今度は上手くやるつもりやで」

食えない顔つきで話す男。フェレスは、その話から彼等が何をしようとしているのかを察知した。

「そっちの都合じゃん。それ、どーでもいいんだよね、正直。だか

ら、さつき言った通りだよ。分かった？」

答えは変わらずフェレスは男を冷たくあしらう。

「つれないなあ。まあ、これ以上は無駄みたいやし、今日は帰りますわ。せやけど、こっちにはいつでも来てもらて」

「しつこいっ！」

感情を露にした怒鳴り声が響き、男は言いかけた言葉を飲み込んだ。

交戦となる一歩手前で身を引いた男は、ふっと笑って静かに闇に溶け込んだ。

犬ごときに心配される。嫌悪感が消えず、残ったわだかまりが二人を更なる混沌へと招く。

哀れな人形を引き連れ、歩み出すは深紅に染まる道。それが本能であると示さんばかりに。

？

月の支配下。あまりにも不自然に閑な森の中、異常なほど獣の唸り声すら聞こえない。辺の静寂とは裏腹に、何故か　胸がざわつく。

薬草を取りに行った帰り道。男は、すぐ近くで獣道を同じく歩く我が子を見やった。持つと言い張った、大事な薬草が入った麻袋を手に、少年は自分を見る父に小首を傾げる。

「デイト　少しの間、ここで待っていていなさい」

「えっどうして？」

村はすぐそこ。獣道を抜け、集落の明かりも見えている距離に来て、父の言葉は少年には理解出来なかった。だが、男は「大丈夫、すぐ戻る」とだけ言い、草木の茂みに少年を忍ばせ、ランブ片手に行ってしまった。

どうしてなのか。何も分からず残された少年は、それでも父を信じ暗闇の中を一人耐え忍んだ。必ず　戻ってくる。そう言い聞かせながら。

膝を抱き、その間に顔を埋める。あれから、ゆづに一時間は経過しただろう。父の姿は未だない。ここからなら、往復でも一時間はいかからない。ただ見て戻るなら……不安が、少年の胸を駆ける。やがて、それは言い付けを破るまでに侵食し、茂みを抜け出た少年は父の姿を追い求め、村へと向かった。

変異に気づいたのは、村の入口に差し掛かった頃。その静けさからだった。まるで、誰も居ないかのように、話し声も笑い声も怒鳴り声も聞こえない。

「……父さん」

震えた声で呟くと、少年は泣き出しそうな顔で父を探し自分の家へと向かおうとした時。

「なんだ、まだいたのか」

見知らぬ声。見知らぬ姿。

「しかもガキだし。つまらねえなあ」

黒いマントを着た男。少年に向けて突き出された剣には、時間が経ち変色した血がこびりついていた。

「あつ……」

震えが止まらない。その場に力なく崩れた少年を、マントの男はニヤリと笑い見下ろす。

「大丈夫だって。お前もすぐに逝かせてやる。じゃあ」

「止める」

「了解っ」

鎖の擦れる音。大きな鎌を片手に後から現れた、同じくマントを着た男。フードの下から覗く恐ろしく冷たい目で少年を見る。

「君が最後の一人だね。何も知らないだろうから、教えてあげる。

こいつに、村人を全員殺せと命令したのは僕。君を殺すなと命令したのもね。君が生きていられるのは、運がいいからじゃない。僕が君を生かしたんだ。解る？ たった独りで生きる苦痛を、君にはあげるよ。ヴァン、行こう」

「はいはい。じゃーなガキ」

黒い男達は、一方的な恐怖と言葉を残し、去った。

恐ろしく綺麗な満月の見守る静かな夜に、目覚めぬ父を必死に呼ぶ少年の声が劈く。そして意識は深紅の海に深く深く沈む。

天窓からは光の洪水、高台から一日の始まりを告げる鐘の音が聞こえる。

朝は無情だ。目が覚めれば、また思い出す。あの日の惨劇を。苦しさから逃れる為に、何度も自ら命を絶とうとした事も。無力で非力な自分を、嫌でも思い出す。いつまで経っても消えない光景。目蓋に脳裏に焼き付いている。あの男の瞳。何も映し出さない深い

深淵の様な、凍りつく冷めた瞳。今の自分は、生かされている。大きな罪悪感。今なら解る。魔族に生かされたという事実につきまとう迫害。生は罪なのだ。

「おはよう、ディオ」

「……おはよう……あの、重い」

「ああ、夜中に甘い物食べたから」

「嫌、そうじゃなくて」

「ディオって可愛いよな」

「はあ？ いきなり何を」

「実は前々から思ってた。女顔だし。デージーみたいな、綺麗な濃いピンクの目も良い」

「つつ、ルカ……近い」

馬乗りで唇が触れそうな距離。焦茶の髪が頬に当たる。相手も男、顔を遠ざけようと両手で体を押しのけようとする。

「勿体ないよな。女だったら、俺の理想通りなんだけど。惜しい」

「やめろって」

止めるどころか、ルカはディオの首筋に息を吹きかける。

「んっ、ル、ルカ」

「あー……それはまずい。いつか、この際男でも」

「ちよっ」

ルカの唇が、ディオの鎖骨に触れようとした時、行為は阻まれる。勢い良く開いた扉から、怒りのオーラを放つ銀髪の女の子が入り込んできた。

「ちよっと、いつまで待たせるつもり？」

彼女の動きが止まった。二つ並んだベッドの一つは空いている。

そして、もう一つのベッドの上、深緑の猫目に映るのは重なり合う二人の男。

「なっ なっ 何やってるのよ！」

「何って、愛撫。大丈夫、まだ何もしてない」

「まだって、まだって 信じられない。もう、ディオが困ってる

じゃない！ どけなさいよ変態！」

長くうねる銀髪を揺らし、ルカの体を力一杯押した。その反動で、勢い良くベッドから落ちたルカは、起き上がり打った頭を摩る。

「この馬鹿力！ 加減しろよな」

「うるさい朝から欲情変態男！ さっさと着替えなさいよ。 그레이が広場で待つてるんだから」

「ったく。 んじゃ、着替えるから出てつてくんない？」

「嫌よ。 またディオに悪戯しないか見張らなきゃ」

「あつそつ、俺ガウンの下何も履いてないからな。 見えてもギャーギャー騒ぐなよ」

ルカは戸惑い無しに、紐に手をかけた。

「分かったわよ！ 五分よ。 五分で出てこなかったら、今度はグレイと一緒に来るんだから」

やや頬を赤らめた彼女は、ルカが紐を外す前にそう言い捨て、踵を返し早足で部屋を出ていった。 靴音は、すぐに階段を降り遠のく。

「リアの奴。 グレイに言うな」

「言うね」

「着替えるか」

「うん」

彼女の事だ。 時計片手に待っているに違いない。 着替えを終えた二人は直ぐ部屋を後にした。 階段を降り、朝早いにもかかわらず同じ制服に身を包む者が居る広場へと着いた。 時間は、五分ぎりぎり芝生の上に無造作に置かれた木の長椅子に、二人は座っていた。 思ったとおり時計片手に無付け顔の彼女の隣には、眩しい笑顔のグレイ。 ルカの言う女顔なら、グレイもそうだ。 綺麗な金髪に、碧眼が良く似合う。

「立ってないで座りなよ」

「いいのよグレイ。 待たせたんだから、反省してもらわなきゃ」

「でも、出校まで時間あるし、皆ご飯まだでしょ？ これ、買ってきたから食べようよ」

微笑んだまま、グレイは大きな紙袋を出して見せた。

「流石。気が利く」

芝生の上に胡座をかくルカに腕を引つ張られ、隣にディオが座る。グレイはそんな二人に紙袋から朝食となる乾燥した果実の練りこまれたパンを取り出し、それぞれ手渡した。まだ少し温かみがあり、口に入れるとほのかな甘さが広がった。

「うまつ」

「でしょ？ 僕のいち押し。あ、飲み物もあるんだった」

一旦パンを膝にのせ、別の袋から片手に収まる大きさの木筒を取り出した。これも人数分あり、同じくグレイの手から渡される。突起した棒を抜き取ると、香ばしい香りが鼻を突く。

「珈琲じゃん。分かってるな」

「まあね」

黒に近い茶色の液体。甘さの残る口内に苦味と香りが一気に押し寄せる。少しの安らぎの時間。空は今日も青く、手を伸ばせば届きそう。ここに来て五^{こせい}星。あの日あの方に逢わなければ、僕は今でも苦痛に苛まれていただろう。

「おい、ディオ大丈夫か？」

ルカの茶色い瞳がディオを心配そうに見上げる。

「えっ、あ うん。大丈夫だよ？」

「アラン様に会うので緊張してんのか？」

「まあ、それは緊張するよ」

「だよな。俺も」

アラン様 僕を救ってくれた人。今は、遠くて手が届かない場所に居る。どんなに頑張っても、もうあの頃のように口を聞くことは有り得ない。遠い、遠い存在。

「アラン様って素敵よね。神^{しんぐん}軍の最高司令官なんて 是あ……お姿を拝見出来るだけで幸せ者だわ私」

「神軍に入れても、そこからセラフィムは遠いからね。現体制になつてからは、尚更だから……」

グレイの言葉に、三人は食事の手が止まる。

「でも、神軍入り出来ただけでも凄い事だぜ？ ま、ここからは実力勝負だから、耀翼^{ようよく}だろうが何だろうが関係ないからなっ」

明るい笑顔でルカはディオの肩に手を回す。

「またくつつく」

ふてくされた顔で、リアはルカを見下ろした。

「なあ、参考までにキリト様って普段どんな感じんだ？」

同じ銀髪のリアにルカは質問をぶつける。これは周知の事だが、流石に皆恐れ多くてこんな突っ込んだ質問はしてこない。それどころか、彼女に近づく事すら躊躇う者は多い。下手な噂が、ケルビム指揮官の耳に入り、それが仲が良い神軍最高司令官のアラン様に届くのが怖いのだ。

「馬鹿兄貴の事なんかどうでもいいわ。ただの怠け者よ。だらしない」

きつぱりと言い捨てるリア。キリト様を馬鹿呼ばわり出来るのは、妹だからこそだろう。そもそも親交も無く素性を知らない僕達は、そこで肯定など出来るはずも無かった。

「でも、羨ましいよ。素敵なお兄様が居て。僕は一人っ子だから、兄弟が居たら楽しいだろうな。って思うよ」

グレイが優しい微笑みを投げる。

「あんな兄貴で良かったら、いつでも貸すわよ？」

「ありがとう」

本当に羨ましそうに、グレイは返事をした。

彼は精麗。地人の様な混血種とは異なる精麗は、遥昔に消滅した妖精の血を引く種族だ。その特異的な能力として、発せられた草木や動物の言葉が理解できる。この力を備えているのは、広い世界の中で彼等だけだ。森や自然の多い場所を好み、彼等の住まう精麗の地ディーヤは、美しい場所だったと聞く。昔は地人と同じように数多く存在していたが、あの日の魔害で種族は絶滅に追い込まれた。ディーヤは魔害で大地ごと消されたのだ。その爪痕が、今でも大地

に刻まれている。まっさらとなつた大地には、未だ草の一つも生えない。ぽつかりと穴が空いたその場所に、一星に一度。グレイは花束を持って出かける。どんな気持ちなのか　家族を失った気持ちは、痛いほどに分かる。一人生きる辛さも。

魔害が起こった時、各地に点在していた一握の者だけが、こうして今も生きている。グレイはその時既にテオスの力に目覚め、このローゼリアに住んでいたから知っている。魔害が起きるきっかけとなる反乱を。

当時の神軍最高司令官、ノア・シエルティの裏切り。王を殺し、数人の仲間を引き連れ王都で神軍に奇襲をかけた。

あれだけ派手に殺り合えば、ローゼリアに住む者の耳に、この真実は直ぐに入った。これから神軍に入る学園の生徒にも、広く知れ渡る事となり、兄が神軍の耀翼であるリアは勿論、地人のル力でも知っている。

あの日以来、余計にローゼリアの地に入るのは難しくなった。天空に、最も近い耀翼の国ローゼリアを護るように、天にも届きそうな純白の壁が大きく阻む。入口などは見当たらず、そのまま先には進めない。此処に入るには、神軍の許可が必要。ローゼリアに住まう事を許された証を刻まれた者だけに、その扉は反応し、白亜の国に通される。

元々、この地は天の使いの者達が住んでいた伝記がある。その血を引く耀翼種の容姿は美麗で、確かに本などで見かける天の使いに酷似している。背には鳥みたいに羽が有り、その寿命は長く普通に一星で一つ歳はとるものの、地人はその一星で十倍は老いている感覚だ。魔族と対することが出来る力を有した者が多いのは、魔族も長く生きるからだろうか。故に神軍の比率は耀翼が多い。地人や精麗など、テオスの力を持つ者はこうして軍の養成所を経て神軍入りするが、その先は実力次第。魔族だけでは無く、反逆者である者をも相手にしなければならない。それでも、僕等は此処にいる。それぞれ、果たすべき事の為に。

「あーちよつと！！ 私の珈琲勝手に飲まないでよつ」

「あ？ いーじゃん。ちよつとくらい、ケチ」

リアの怒鳴り声が響いた。それに反攻するルカの声も。グレイは、二人を微笑ましく見つめている。

「ちよつ、おい！ デイオ見てないで止めてくれよこの暴力女」
背後からリアに首を絞められているルカが助けを求める。

「あ、リアその位にしてあげて、本当に落ちそうから」

「あら、ライバルが一人減るのは良いことじゃない」

「まあそれはそうだけど……」

「あーデイオ酷い。俺を捨てるのかよー」

「リア、もう止めてあげて。行く時間だから。ねっ」

にこやかにグレイが止めに入った。彼の言うことを素直に利くリアは速やかにルカから離れ、スカートの裾を払う。

「助かったーサンキュ、グレイ」

「そんな、いいよ。さ、行こう」

行こう。そう言ったグレイの目付きは、穏やかな彼とは別人の様な強さを瞳に宿していた。

いつもの道を歩く。

白壁に浮かぶ至るところに刻まれたアラベスク。若葉の隙間から燦々と降り注ぐ光と、尾長の虹ノ鳥。鮮やか七色の毛を揺らし、唄う。鳥とは思えない心地よい鍵盤の如く音階が、あちこちで響く。

楽園と呼ばれるに相応しい光景。同じく学園に向かう耀翼の美しさが映える。

学園は宿舎同様、王都北西部アルカディアに在る。校門を抜け、真ん中に噴水のある広場を抜ける。迷路のような校内を、迷わず教室へ向かい荷物を降ろし、またすぐ戻る。

広場を突っ切り開かれた重き扉をくぐると、壇上を前に定置に着いた仲間がちらほらと居る。厳粛な空気の中、自分達も各場所へと歩みを進め、起立のまま時が過ぎるのを待った。純白のローブ姿に

正装した教生達も、厳かに。緊張で早鐘を打つ心臓。時が進めば進む程に酷くなる。憧れを通り越して、敬愛する人に会える。

大きな軋り声を上げて、扉が閉まる。そこから、始めの方の話は耳に入らなかった。ただ、その名前だけは聞き逃さなかった。アラン様 壇上に上がる凜々しい姿は、あの頃と何一つ変わらない。歳など一切とつていないかの様。

引き締まった体を覆うのは漆黒の軍服。その胸に飾られた銀色のバッジは、セラフィムを表す炎に覆われた蛇。さらりとなびく黒髪に色白な幼顔には、黄金と燃える炎の瞳。昇る太陽と沈む太陽の輝きは増すばかりで、あまりにも眩しい。凜々しい姿に、瞳は釘付けになる。

口を開けば、推敲な声が脳に響く。甘く酔いそうな夢心地は、挨拶だけであつさり掻き消えた。

本来ならば、この時期にこの場所をアランが訪れることは無い。だが、本日は新たにここから神軍入りを果たす者だけが並んでいる。壇に立った理由は、軍のトップとして挨拶を兼ねているからだ。

彼の話は、軍の組織に関する事や魔族への各部隊に関する事まで細かく話をされた。上官の指示には必ず従い、階級を重んじる事。階級が上がるにつれ、任務の危険度は高くなる。だが、昨日可決した軍の階級改訂。

横行する魔族への対策として、主要各国各都市に中級上位ドミニオンまでの神軍を在住させるという事。だが、今まで通り要請にも応えていく。そこで、要請で上がった魔族であるかは不明な事態及び、子爵級の魔族に対して、軍はエンジェルの下に新たに設けたセラフィンにこれを任務として与える。これから神軍入りする者は、このセラフィンに属し軍の一員として、任務の為に動いてもらう。現段階では、上官を配置する程の案件は寄せられていない。故、部隊はそれぞれの能力を考慮し四人編成、うち一人をリーダーとする。それを十組構成。これは、新たな試みだが、ここでの働きを評価し、昇級も可能。

「以上。覚悟のない者は辞退して構わない。以前にも増して魔族が横行している中、だからこそ僕達は」

話の途中だったが、周りがどよめくのも無理はない。この発表が異例すぎるのは、誰もが分かっているからだ。知る限り神軍の階級が増えることも減ることも無かった。誰もが神軍入りの時はエンジエルの各部隊に入隊し、そこから先は自分次第。入隊直後は、殆どが書類整理等、簡単な事からだ。だが、今回の話ではエンジェルの下の階級でありながら、任務の内容はほぼ神軍三下級と変わらない。各教室に移動した後も、話題はこの話で持ちきりだった。

「まさかだよな。こんなに早くとは思わなかった」

言葉とは裏腹に、ル力はやる気を漲らせていた。

「馬鹿ね。もっと緊張感を持ちなさいよ」

「そうだね。調査とはいっても仮に魔族が関与しているなら、戦闘は免れないし、なにより子爵級とはいっても魔族だ。油断は出来ない」

グレイは今回の事を鋭く読んでいた。卒業したての自分達までもが駆り出される程なのだと。

「でも、やっと、アラン様のお役にたてる」

ディオの想いに、リアもグレイもル力の時のように強くは言えない。彼が、アランに救われた事は前に聞いて知っている。その恩を返すため、能力に目覚めた時、神軍入りを懇願した事も。

覚悟なら既に出来ている。

彼の目はそう、語っていた。

「ディオが、一番のライバルだね。リア」

グレイはくすりと笑った。彼の強い想い　アランがディオを一瞬見て切なく瞳を揺らした事など、あのどよめきの中じゃ誰も気付かなかっただろうが。本気でリアがアランに好意を抱いているなら、きっとディオは強敵に違いない。そう思うと、なかなかに頬が緩む。「何よー。私、別にそんなんじゃない……」

否定しつつ、ちらりと隣のル力を見やる。会話の意味を理解して

いない彼は、向けられたリアの視線を瞬きで迎える。

どうやら、彼女のアランへの想いは懂れ止まり。

「なんだよ」

「別に」

ル力は冷たくあしらわれ短気を起こすが、授業の始まりを告げる鐘の音に制御される。一度は立ち上がった腰を不本意ながら硬い椅子へ押し戻し、ふんつと鼻息あらく前を向く。

教職であるヒナタ講師が、教本を片手に入ってくる。

元神軍の彼は、肩に掛かりそんな焦げ茶の髪を揺らす。正面を向いた彼は、怪我で失った右目を隠すように眼帯を付けている。再生治療を望まないのは、忘れない為だと言っていた。自分の思い上がりから負った傷だからと、僕達に教えてくれた。過信はしてはいけない。魔族は、そういうところをも突いてくると。

ヒナタ講師がああ発表の後にして授業は、魔族についてだった。良く知った上で望め。魔族の事も、自分の事も。そういう事なのだろう。最後となる授業。皆、真剣に食入るように聞いていた。

魔族には三階級ある　一番賢く強い貴族級。群れを成さず、単独を好む。数はそう多くはないものの、その強さは神軍の上位階級者と同等。次いで、騎士級。貴族級ほどの力ではないが、こちらも神軍と渡り合う程の力は持っている。戦闘好きで、団体が多く常に武器を携帯している。最後に、子爵級。力は強くないものの、夢に入り込んだり出来、地人の精気を糧としている。徐々に弱らせ、最後には喰らう。

一番厄介なのは貴族級の魔族で、彼等だけがイヴを生み出す事が出来るのだ。その血を口にした地人は、イヴになる。血を与えた魔族の命を利く、玩具となるのだ。主が命ずれば、地人であろうと何であろうが襲いかかる。

一通りのおさらいで再確認する。

魔族は平穏を乱す。自分みたいな思いをする人が、これ以上出な

いようにしなければならぬ。そう強く心に思った。

最後にヒナタ講師は、セラフィンとなる生徒達の請け負った要請を読み上げた。三星クラスの生徒はークラス二十人、それが四つ。内合格者は四十人。この人数がセラフィン入りを果たし、後日より任務に付く。

甘い事は言つてられない。糸が張り巡らされ、触れば肌から血が流れる。そんな緊張感が、教室中には漂った。

夜の帷。

時は二時を指す時刻。アランは、机の上に置かれた書類に目を通すと、溜息を零した。紙面の中には十組に振り分けられた候補生の名前、振り分けられた任務が記載されていた。

こう軍が出払つていては致し方あるまい。程度の低い任務なら、彼等でも問題ないでしょう。そう、軍議で多く上がった意見を認めたのは自分だ。

「ご執着の地人早速、行くんだって？　まあ、思い通りにならないもんさ。そんなに心配なら俺が密偵になろうか？」

騎士級の魔族の団を殲滅してきたばかりのキリトが、その報告も予てアランの元を訪れていた。頬や服に魔族の血をつけたまま戦場の生々しさを残した状態で、ソファアに座り、足をテーブルに投げ出している。

「妹が行くからやる。シスコン」

「アシッド」

「ちゃんとノックはしたで。そのアホウの声がうるさあて聞こえへんかったやろうけど。頼まれてた地図、ここ置いておくで。ほな、おやすみ」

長い金糸の髪を上手に巻き上げた白衣姿の彼女。高い背に、今はヒールを履いている。眼鏡の奥から金と緑の瞳を薄め、キリトを冷

たく見下ろすと、直ぐに部屋を出た。

「かわいくない女。ほんと、違うから。それに、言っとくけどリアはマジで強いから。特に拳が」

嘘が下手な彼の態度から、彼女の言った事が本当なのだとアランは思った。

「悪いが、君には東へ行ってもらう。副官に詳細を伝えてあるから、戻ったら確認してくれ。出発は急ぎで頼む」

思惑通りに事が進まず、キリトは肩を落とした。やや不貞腐れた顔をしながら渋々承諾する。

「へーい。つたく、馬車馬だぜこりゃ」

「すまない」

「別に、気にしてねーよ。で、あいつら出発は何時なんだ？」

「三日後。仮に、彼等が戻る前に君が報告書を上げられたら、さっきの話、認めてもいいよ」

「マジで？ で、で、今回の仕事は？」

「騎士級。宜しく頼む」

分かつてはいたが、がくつと肩を落とす。

「……だよね」

顔を引き攣らせ苦笑い。その後は、すつくと立ち上がりアランへ背を向けると、コートを肩に掛けた。そのまま入口まで歩き、去り際に右手をさらりと振ると、静かに部屋を出ていった。

賑やかだった部屋も、アラン一人。椅子を回転させ、窓越しに夜空を見上げた。うつすらと映り込む顔が物悲しげだったのは、自分を慕う子を失うかもしれないという恐怖からただだろうか。

そんな自分を見ていられない。アランは瞳を閉じた。そこへ、扉を叩く音が、今度ははっきりと聞こえた。

「アラン様、私です」

「シェリー……どうぞ」

「失礼します」

アランの元に歩む彼女の胸には、セラフィムの階級章があった。

小柄で聡明さを感じさせる彼女の、真っ直ぐ伸びた淡い栗色の髪が、近づくと腰元で揺れる。

「王が　今直ぐアラン様にお会いしたいと」

彼の前に立ち礼をした後、彼女はそう告げた。

「こんな時間に？」

「はい、それは承知の上です。軍議でお忙しいのは解っておいでですが　滅多にこのような事は言われませんので……」

彼女自身も、お願いされ断れず来たのは分かっている。

「分かった　だが、今夜はもう遅いので明日必ず。そう伝えてもらえるかな？」

「承知しました」

「すまない。王の事、副官の君に任せっぱなしで」

「いいえ。私は、アラン様に信用していただいているのだと　それだけで十分です。では、王にはそのように」

「ああ。ありがとう」

用事の済んだ彼女は、にっこりと微笑み、アランからの伝言を伝えに王宮へと戻っていく。

時計を見れば三時近い。

？

話には聞いていたが、思っていた以上に体が震える。防寒として用意された外套が無ければ、今頃凍え死んでいただろう。雲がかかった闇から落ちる雪は積雪し続け、くるぶしをとくに超えて尚、降り積もる。吐く息は白く、体全体を針で刺されている感覚。鼻や頬は冷えきり、そこだけ切り離されているみたいだった。

与えられた任務の先は、一星の殆どが雪に支配されるリシラム国。依頼されたのは、神隠しの真相だ。

神軍からの書状を見せ首都であるセツに通して貰う。用意されていた馬車で一旦は街中を進んだものの、リシラム国の王に挨拶した帰りには、そのまま情報を探し求める為に歩いた。

王宮の目の前には時計台があり、その周りを囲むように扇状に家や店が建ち並んでいた。建物自体は高く二階建て程度で、一軒がやや幅広い造りになっている。メインの通り以外の道は、迷路の様に小さな路地が幾重にも繋がっていた。まず、ここの土地勘がなければ迷い込んでしまう。地図を片手に、印を付けながら何とか聞いて回っていた。

王宮で聞いた話では、物売り・資産家・旅客問わず、消えるのは青少年ばかり。それも、その美貌は女のように美しいと。耀翼とたがわぬ容姿の子ばかりが消え失せる。神隠しと噂されているが、その情報だけでは真実にたどり着くのが困難に思えた。

この街の人達は、皆神隠しを知ってはいるようだが、残念そうな顔つきで首を横に振るばかり。何一つ有力な情報を得られないまま時間だけが過ぎる。早くなんとかしなくては。気持ちだけが急いでいる。初めての任務。何がなんでも解決したい。誰もが胸の中でそう思っている。

「二手に分かれよう」

この隊のリーダーと任命された 그레이が提案してくる。

「そうね、その方が効率的」

「それじゃ、僕とディオ、ルカとリアで行こう」

「了解」

「分かった」

「決まりね」

「ディオ、地図を貸して」

「うん はい」

그레이は手渡された地図を四人の間で広げ、指でルートをなぞる。

「僕達はこっち、ルカ達は反対にこっちから回って。あまり遅いと迷惑になるから、十時を目処に用意されたこの場所へ戻る。これでどうかな？」

視線を三人に回し、様子を伺う。

「賛成。時間もないし、それでいきましょう」

懐中時計を引っ張りだしリアは時間を確認した。現在の時刻はあと十分もすれば九字になる頃

「よしっ。んじゃ行くか」

「そっちは頼んだ。僕達も行こう、ディオ」

「うん」

反対方向に歩き出した四人の距離が徐々に離れて行く。

それから暫く歩き回ったが、何一つ有力な情報は出てこないまま十時を迎えた。

「明日、また頑張ろう」

表情の優れないディオを 그레이は励ます。

「うん、そうだね。ありがとう……」

落ち込む気持ちは分かる。出発時 期待している。そう、アラソン様に面と向かって言われれば。だが、あの時の最高司令官の微笑みは、言葉とは裏腹に見えた。本当は、心配している。目は壇上に上がった時と同じで、憂いを感じさせた。上手く隠して見せていたから、その言葉を信じたディオが焦るのも無理はない。

「おい、ディオ、 그레이」

後ろから、聞きなれたルカの声が二人の足を止める。振り向くと、リアとルカが足場の悪いところを走って向かってきていた。

「どうだった？」

ルカの問いかけに、 그레이は首を横に振り駄目だったと答える。

「そう…… 私達の方も同じよ」

ふせ目で、リアは言った。

手分けも虚しくこの日は何の収穫も得られなかった。四人は、揃って用意された拠点となる場所へ足を進めた。

セツの中心部にある街の一角。家が立ち並ぶ時計台に近い角の家。ここが、彼等に与えられた居住場所。国王は王宮に住まう事を望んだが、彼等はそれを断った。それではせめてとこの家を用意してくれた。が、灯りを点けた中は、豪華で家具も何もかもが備え付けだった。

年の半分が雪に埋もれる寒い地ならではの、暖炉や分厚いカーペット。テーブルもソファも王宮にあった物と同等で、細かい細工・光沢感がある。至れり尽くせりの環境から、国の期待度が伺えた。同様に、余程神隠しが問題化しているのだろうと。困窮しているからこそ、軍に要請したのだろうが 無言の手厚い圧力の凄まじさを四人は感じた。

荷物を降ろし外套を脱ぐ。温まっている部屋に恐る恐る入る。

「なんか、いいのか？ こんな待遇で」

テーブルに置いてあった籠の中から赤く色づいた果実を一つ手に取り、香りを嗅ぐ。甘い匂いが鼻腔に入り込み、熟していて食べ頃なのが分かる。切れば、中身はきつと蜜が沢山入っているに違いない。

「初めてだから、僕には良く分からないよ」

素直な感想をディオは発した。

「だよな。しかし凄いな。まんま王宮って感じた。そわそわしちゃう」

林檎を籠に戻し、今度は硝子張りの食器棚などを開けて回る。

「全然、そわそわなんかしてないじゃない」

ルカの行動を呆れた目で見ながらリアは言った。

「えーだって、用意されたんだから仕方ないだろー？ それに、解決すればいい話だし。だったら、好きに使わせてもらうまで　おつ、すげー飲みもんも豊富。で、こっちは、肉も野菜も充実してるじゃん。至れり尽くせりだな、こりゃ」

室内の扉という扉を全て開け、その度に何が入っているかを言うて知らせるルカに、リアは溜息をつきながらソファーに座る。前向き思考の彼の、切り替えの速さだけは見習いたい。気後れした所で、状況は変わらないのだから。

三人が圧倒されている間に、ルカは見つけた食材を抱え台所に立つ。

「飯、適当でいいよな？」

率先して食事の支度にとりかかるルカに、返事を返した後、三人はようやく自分も何かしなくてはと動き始める。ご飯が出来るまでの間。それぞれデイオはお風呂の用意、リアは食器の準備、グレイは荷物の整理等を行う。

暫くして、香ばしい香りが部屋中に広がってくる。自炊歴の長いルカだからこそ、つい期待してしまう。出来上がった料理を、フライパンごとテーブルに持ってきて、並べられた真っ白な皿の上に乗せていく。メインの皿には、焼かれた骨付きの子羊にマスタードソースのかかった肉料理。付け合せに、茹でたじゃが芋や人参。別の皿には温めた丸いパン。深い丸皿には野菜スープ。湯気が立ち、どれも美味しそう。

「さー食べようぜ」

これを本職にしても食べていけるくらいの腕はある気がする。見た目の盛りつけも、短時間な割に上出来。頂きます。といい、ルカの料理を口にした僕達は、改めてそう思った。

「美味しいよ、ルカ」

「だろ？ いい材料揃ってたからな。初日だし、明日の為に体力つけなきゃな」

「ありがとう」

隣に座るディオの頬に付いたソースをルカは指で拭き取り舐める。

「本当、可愛いことすんなよ」

「あ、ごめん」

微笑み合う怪しげな雰囲気の二人に、リアが咳払いする。

「まったく、食事中よ」

「なんだよ、妬いてんの？」

「違うわよ」

「嘘つけー」

「言っとくけど、俺達相思相愛だから」

「えっ」

突飛なルカの発言に、ディオとリアの驚きが重なる。そんな事な
いと慌てるディオと、噛み付きそうなリアに、グレイは声を上げて
笑う。

「ごめん、可笑しくてつい。もう、二人共すぐ本気になるんだから
ね、ルカ？」

「そんな事ないぜ、俺は本気でそう思ってるっての」

「でも、意味合いがしがうでしょう？」

そう言われてルカはディオを見つめる。きょとんとする顔が、ま
た愛らしくて。

「まーそうだなー。イヤ、でも、あの時は流石に男でもって思っ
ちやっただしな」

回想するルカに、リアが吠える。

「そーよ！ グレイ、私は見たんだから。言っただじゃない、ディオ
の上で」

「わーリア、それは、ねっ、今は」

思い出したディオの頬が淡く染まる。そのやり取りが学園と同じ
で、空気が和む。そんな、どうしようもない会話をしながら食事は

進み、ルカの料理を残さず平らげ、腹を満たした。空になった皿を片付け洗う。後片付けを終わらせた後は、夜中にも関わらず翌日の作戦を立て始める。

眠気覚ましに珈琲を飲みながら、地図をテーブルに広げる。伺った家にはバツ印が書き込まれていた。

「この近隣は大体回ったんだね」

「後は町外れと、この界隈。それと、観光地も確かめておこう。何か、手掛かりがあるかもしれない」

グレイの指先は主だった観光地である氷雪の湖・明星の丘・緑帯の原を辿った。どこも首都からは離れているが、リシウム国に来て観るといったら、これらが有名である。一見の価値ある美しい景色であるが為、態々見にこの国を訪れる者が多いのだ。その客足を取り戻したいのも、神隠しを解決して欲しい理由の一つと言えるだろう。

慣れない雪景色も、こうして暖かな場所から眺めるのも悪くはない。むしろ、幻想的に揺れる雪は美しく、この目に映る。

「また、二手に分かれる？ 明星の丘は割と近いけど、氷雪の丘と緑帯の原は、一日では行けないよ？」

ディオの言う通り。真逆で対極している二つの地を一日で行くのは無理だ。

「それじゃ、明日はまずここいらの残りを回るを一つ。明星の丘を一つにしたらどうだ？ その後、この二つに行く」

「その方が良さそうね。問題は誰が何処に行くかよねー」

リアの冷たい視線がルカへ向かう。

「ま、俺達を引き離そうってのねっ」

「当たり前」

「まあまあ二人共、今日別れた様にすればいいんじゃない？ 僕とグレイ、リアとルカで」

そこで視線を合わせる二人は、目を合わせるやいなやお互いにそっぽを向く。

「喧嘩するほど仲がいいっていうしね。そうしよう。僕等は近辺を
行くから、二人は明星の丘へ」

「ちよっ勝手に決めんなよー」

「あら、私は構わないわよ。それより、足でまといにならないでね」

「上等だ。お前こそ、俺の邪魔すんなよ」

売り言葉に買い言葉。翌日の事が決まった事で、明日に向けて体
を休める事となった。

人数分の寝室が部屋割りで割く時間をなくしてくれた。柔らかい
ベッドへ身を沈めた時刻は、夜中の一時四十分。ここまで来るのに
かかった日数、馬車や閑散とした小さな村の硬い板の上に寝ていた
からか、気持ちよすぎて睡魔は直ぐにやってきた。うとうとと目蓋
を開けては閉めを繰り返す。何度か波に揺られているうち、意識は
一気に引つ張られる。

それから四日。何も出ないまま時は過ぎた。日に日に焦りが出
てくる中、歩き疲れた一日の最後の眠り。暫く夢なんて見る余裕も無
い程だったのに、この日落ちた先は真つ白な空間。僕だけがそこに
居た。辺りを見回してみても、誰も何も無い。ただぼーっとしてい
ると、背後から黒い蝶が現れた。黒い翅に紫の長い突起の珍しい蝶
が。

「黒死蝶」

死した屍に群がる習性のある黒死蝶。死臭や血を好み、別名は吸
血蝶と呼ばれる死を呼ぶ蝶。その黒死蝶が一匹二匹と飛んで行く。
徐々に増え、黒い塊となってその場所に群がる。

様子を見に恐る恐る近づくと、黒死蝶は一気に逃げ去った。一体
何に群がっていたのか

「あ……」

父さん

刹那、目が覚める。飛び起きた自分は夜着を汗で濡らしていた。
手の平にも尋常じゃな汗が浮き出ていた。

どうして、今あんな夢を。

ディオはベッドを降り窓辺に向かう。カーテンを開けて外を覗くと、まだ日の出までは時間があるらしく暗いままだ。

冷たい硝子に額を押しつけ目を閉じる。魔族に殺された父の亡骸、開いた瞳は僕を見ていた。逃げろと言った、あの瞬間の瞳のまま。

父さんの目を閉じてあげる事も出来ず、僕はここに居る。

父さん。

枯れた筈の涙が目頭に熱く滲む。ぼやけた視界が今一度外の雪景色に向いた時。それは確かに彼の視界に入り込んだ。今度は夢ではない。

「嘘……」

黒々とした翅に紫の突起。その蝶は舞うように上下に揺れながら飛んでいる。咄嗟だった。ディオは夜着に外套だけを羽織りブーツを素足に履いて部屋扉を勢い良く開けた。驚いたのは、グレイも同じ行動をとっていたから。

「グレイ、黒死蝶だ」

「うん、声がしたから。急ごう」

二人は死を呼ぶ蝶を見逃さない様に追いかけた。ゆらりゆらり、蝶はゆつくりと飛んで行く。積もった雪は膝まできて、ただ歩くだけでも困難だが、二人にはそんな事考えている余裕はない。見逃さないように空を仰ぎながら進んだ。やがて、蝶は吸い込まれるように一つの立派な邸に入っていた。

閉められた門の横。誰の邸なのか。紋章はリシラム国を示し、邸の大きさからして国の中枢の地人に違いはない。

ディオとグレイは顔を見合わせた。言いたいことは分かる。この中に死がある。

「戻ろう」

「でも……」

「分かっている。けど、今はどうにも出来ないよ。この時間だ、取り合ってもらえない。それに、見間違いだと言われたらそれまでだ

よ。証拠が無い限り難しい。どのみち……もう、遅い」

間に合わなかった　黒死蝶は死骸に群がる。

デイオは強く拳を握った。助けられなかった。僕達がこんなに近くに居ながら何もしてあげられなかった。その悔しさから。

「でも　大きな手掛かりだよ。神隠しと関係あるかもしれない。だから、今は戻ってルカやリアにも説明しなきゃ」

グレイは冷静な判断を下した。

二人は一旦邸へと戻り、明かりが付いている部屋へと入っていった。夜中に大きな音を立てて部屋を飛び出したのだ。訓練されている彼等が目を覚まさない筈はない。静かに、帰りを待っていた二人は、デイオ達が戻ると、その理由を訊いてきた。

暖炉に火が入り、パチパチと音を立てて燃える。

グレイの話に耳を傾けるルカ達の額にぐつと皺が寄る。

「こんな時間じゃ、誰も何も知らなくて当然だな。黒死蝶か　で、その邸ってどの辺だ？」

カーペットに胡座をかき、ルカは地図をグレイに向けて広げる。

「この角を曲がって真っ直ぐ、ここだ」

細長い指の指し示す先。

「……ヴォルドア卿の邸……」

地図には、はっきりと記されていた。国王に次いで影響力のある人物。王宮に挨拶をしに行った時にお会いした。高位な地位に関わらず、物腰低く温和な印象を受けた。短く揃えられた黒髪に、中肉中背。小奇麗で四十を越えている様には見えない若々しさだったのを覚えている。

「厄介ね。権力者となると、迂闊には飛び込めない。仮に彼が神隠しに関係しているとして、そう簡単に尻尾を出すとは思えない。まして、証拠など握り潰すのは容易い。だから、神軍への要請も通ったのかもしれないわ」

リアの鋭い見解。神軍を欺く自信があるからこそ呼び寄せた。成果を挙げられなければ、国は要請解除の手続きを行える。そうなれ

ば、神軍の面子に泥が付き、自身は罰から逃れられる。

「なめられたもんだな」

「そうね」

歓迎する笑顔の裏で嘲笑っていたのかもしれない。何も解決など出来やしないと。

「それだけは アラン様にご迷惑はかけられない。絶対に」

自分達が失敗し、リシラム国に頭を下げるのはアランだ。国は期待を込めて要請を出す。その期待に応えられなければ当然、信用も傾く。

「僕達は何も知らない。何も見ていない」

「グレイ？」

「近づくには、その方が良いと思う。変につついてガードを固くされては、証拠を掴むチャンスがなくなる。まして、退去を早める事になりかねない。それに、まずはあの邸にどうにか入り込んでみない事には……」

相手の懐に飛び込むには、相手を油断させてから。そうグレイは提案した。

「あー！！ もう！！ 今すぐ乗り込みたい所だつてのに 分かったよ」

声を荒らげ、髪をぐしゃぐしゃと掻き乱しながらル力は承諾をする。今すぐ突っ込みたい気持ちは痛いほど良く分かるが、自分達だけの問題じゃない事から、グレイの意見をのむ。

難しい局面。だが、この事を胸に、昨晚立てた計画通りに進む事とし、この日は再び眠りについた。

夜明けは近く、窓越しに見える空はやや明るみを帯びた青。眠るうにも、なかなか寝付けないのは、黒死蝶の夢が招いた死の影の所為だけではない。大きな不安がデイオの胸の中を凌駕していた。本当に解決出来るだろうか。そう思えば思うほどにアランの顔が浮かび頭から離れない。失望されたくない。そう、強く思う。

頭まで深く毛布を被り小さく丸まり、ぎゅっと目を閉じた。

時間は刻々と刻まれ暁の空。止んだ雪は大地に根を張り、光を浴びてキラキラと輝く。

目覚めは扉を叩く音によりもたらされた。

「息子が、息子が帰って来ないんです！」

幾度となく叩かれる扉の向こう側から聞こえる女の声は、激しく訴えた。扉を開けると、泣き崩れる女が一人。取り乱し、息子が帰ってこないと言い続ける。支えれば体は冷えきり冷たい。デイオは、優しい言葉をかけながら落ち着かせ、暖かな部屋へと招き入れる。

ソファアへ座らせると、ルカは温めたミルクティーを差し出した。「それで、詳しくお聞かせ願えますか？」

頃合をみてグレイは女に話しかけた。

堰を切ったように、女の口からは言葉が溢れた。

女は息子と二人きりでリシラム国の端に住んでいた。この中心部からは丸二日かかる距離らしい。十五の誕生日を迎え、そのお祝いに用意された贈り物を、足が不自由な祖母から受け取りに中心部へと向かった。神隠しの事は知っていたから、本当は外に出したくは無かったが、息子は祖母に会いたがっていたので、その気持ちを組んだ。勿論、十分に注意はするように言い聞かせて、送り出した。だが、行ったまま一週間が過ぎても帰ってこない。心配で、母の所に来たが、息子は既に戻ったと聞き、途中で行き違いにでもなったかと思い家に戻ったが、息子の姿は無い。そこで、また母の元に来た時に、神軍が来ている事を聞いたのだと言う。

「どうかお願いします。息子を、探して下さい。お願いします、お願いします」

涙を流し懇願する女性に、リアはそつとハンカチを手渡し、背中を摩る。

「息子さんのお写真ありますか？」

デイオは震える手から、そつと写真を受け取る。

ところどころ皺が入った写真には、微笑む少年の姿があった。色

白で、黒い艶のあるサラサラとした髪。優しそうな茶色の瞳。鼻筋の通った、綺麗な顔をしている。神隠しにあった人達と共通点は多い。

頭を過ぎったのは昨晚の黒死蝶。それが神隠しの正体であるならば

「このお写真、お借りする事は出来ますか？」

「構いません！ 息子が帰ってくるなら何でも致します！ どうか、息子を見つけて下さい。お願いします！」

深く倒れ込む様に、女性は頭を下げる。

「尽力致します」

ディオは優しく答えた。縋る思いで助けを求めてきた女性を落ち着かせた後は、家まで送り届けた。

胸が痛い。

万が一の可能性を思えばこそ。

「必ず見つけよう」

隣を歩く 그레이 が力強く言う。

「そうだね。ルカ達、大丈夫かなあ」

「あの二人なら心配ないよ。なんだかんだ言っても仲いいから。それに、腕も確かだしね」

予定通り分かれて搜索する僕等は、写真を手を目撃証言の方も探していた。思った通り、何も出ては来ない状況が続いている。

今朝から空は青く澄み切っているのに、それとは裏腹に表情は曇る。

？

「すみません。どなたかいらつしゃいませんか？」

街から少し外れ、奥まった家の扉を叩く。日陰となっている所為か、湿った空気がまとわりつく。

「はい」

間を置き中から出てきたのは、背の高い鍛え上げられた肉体の持ち主だった。雪国には不釣り合いの焼けた肌。黒々とした短髪。軍人の様な鋭い目。妙に落ち着いた男に、只者ではない印象を受けた。やや皺の入った顔は、二人を見下ろす。

「神軍が、何かご用で？」

身分証を提示していないにも関わらず、男は二人が何者かを見抜いた。

「身なりで大体解る。階級はエンジェルか……嫌、血腥さがしない。まだ学生か？」

神軍に関して詳しい。グレイとディオは顔を見合わせ、男を警戒した。

「何故」

ジャレット、寒い。

その声は確かに聞こえた。精麗のグレイだけでなく、ディオにも、しっかりと。

「悪い。すまないが要件は中で聞く。入って」

家の中へと招く男への不信感が上がる。素直に分かりましたと言う程、二人は男を信用してはいない。

「つつたく」

距離を置くディオ達を両手でぐいつと強制的に中へ引き込み、男は扉を閉める。内側から鍵をかけ、入口の前に立った。

「な、何を」

「うちのレディは寒さに弱いんだ。それに、話があつて来たんだらう？　今珈琲でも入れる。その辺に適当に座ってくれ」

狭い部屋。男は二人に背を向けてテーブルにコップを置き、珈琲を容器から注いでいく。立ち尽くすディオとグレイだったが、目の前に現れた豹が唸り声を上げてにじり寄るのに、後ずさりを余儀なくされた。そのまま、暖炉の前まで誘導される。

「レディ。その辺にいなさい」

湯気の立つコップをトレイに乗せて男が歩み寄ると、豹は大人しく座った。

「君達も、そこに座って」

「あの」

食われないのか？

また、声がした。それは、紛れもなく豹の居る方からで、食われないのかという声通りに牙を見せる。

「レディ、止めなさい」

制止され、二人へ一度だけ唸ると、豹はそっぽを向いた。そして、その姿はゆっくりと溶け、人形へと変化した。

ディオもグレイも驚きを隠せない。それは獣であつて人に成る、神獣と言われる生き物であつたからだ。ディオにも声がきこえたのは、この女の正体が神獣だったからだ。だが、こんな場所に神獣が居るのが不自然だ。神獣を従えられるのは神軍のみ。

「っ熱い」

目の前の女はコップに口を付けて、顔を顰める。この姿だけを見れば、誰も彼女が獣であるとは思わないだろう。艶のある、長いさらさらの茶の髪。猫科特有の丸く大きな瞳。細い手足。

「早く座れ」

コップに息を吹きかける合間に、女は二人を睨む。突き刺す視線に押され、二人は腰を下ろした。

「さあ、君達もこれを」

先に座っていた男が、ディオとグレイそれぞれに湯気の立つコッ

プを手渡す。

「それで、要件は？」

神獣を従える男　神軍に詳しい筈だ。鋭い洞察力も、そう考えれば納得がいく。

「貴方は誰なんですか？　彼女は神獣でしょう？」

グレイは真新しいセラフィンの階級章を見せ、彼に質問返しをした。

「……見慣れない階級章だな。そういや、アランが継いだんだろ？　最高司令官。あいつ、元気にしているか？」

アランを呼び捨てにする。それは、相当近しい者でない限りそうは呼べない。

「どうして……アラン様の事……」

ディオの問いに男は軽く息を吐いた。

「　察しはついているだろ？　ジャレット・クロフォード、俺は元神軍だ。アランと同じ部隊だったから、あいつの事は良く知っている。ただ、あの事件が起きる前に俺は除籍になったから　あいつが元気なら、それでいい」

男は目を一度閉じた。当時を思い出している様で、たまらなく切ない顔をする。

「アラン様と同じ部隊とは、セラフィムだったのですか？」

「ああ、そうなるな。ところで、その階級は？」

「これは、セラフィンです。エンジェルの下になりますが」

「セラフィン？　へえ……神軍も変わったんだな」

「それより　何故、除籍に？」

当時、アランと同じ部隊。現在のアランの姿と比較をし、彼の歳のとり方から地人である事が分かる。地人がセラフィムまで上り詰めての除籍とは、俄に信じがたい。自ら除籍を願い出るか、はたまた神軍に属せない程の罪を起こしたのか。どちらにしても、除籍とは余程の事なのだ。

「殺したんだ。仲間を、この手で」

男は拳を握る。

「仲間を……どうして」

「魔族には体に乗っ取れる奴がいるんだ。相手の体に入り込み、相手を自由に動かす。相手の思いとは裏腹にな。散々悪事を働き、わざと捕まる。そして、そいつが処刑されるって時に体を捨てるんだ。処刑台の上でいくらか弁解したって誰もそんなの聞いてはくれない」

「そんな」

「俺の仲間は、その魔族に乗っ取られた。そいつとの戦いで弱った所を狙い、身体に侵入した魔族は、上手くそいつになりきった。誰も、気づかない位に。そうして、神軍の情報を同族に漏らしていたんだ」

「でも、どうしてその人が魔族だって気づいたの？」

「そんなに神軍を欺く魔族を、何故見破れたのか。」

「ジャレットは、膝枕をしている彼女の髪をそつと撫でた。」

「レディは、魔族が嫌いなんだ。魔族に関しては俺達より鼻が効く。だから分かった。あいつに敵意を向けて唸った時に　おかしいとそれで調べたら、要請に行った先で度々魔族に逃げられている事実が上がった。だが、そこには何の証拠もない。だから遠征があった時に、俺は罫を仕掛けたんだ。嘘の情報を伝え、もし、そこにそいつが来たら……違うと信じたかったが。俺の前に、そいつは現れた」

「それで」

「殺した。中の魔族ごとな。だが、それを知らない軍からしたら俺は仲間を殺した異端者でしかない」

「だから除籍に？」

「本来なら処刑されてもおかしくない所、アランは一人この件について調べ上げ意見した。だが聞き入れてはもらえなかった。その後、ノア様の温情により罰が軽減。それで除籍に留まったが、今一度罪を犯せば処刑は免れない」

「そんなつ、そんな事信じられない」

「そう、だろうな。俺も信じたくはないさ。あの人が裏切り者なんてな。ま、除籍となった俺には、どうこう言う資格はない。それで俺のことより今度はお前たちの番だ」

飲み終わったコップを床に置き、ジャレットはディオ達に視線を向けた。

こんな場所で、こんな話を聞くとは思っていなかった二人。ノアの名前を聞いた時の、 그레이の強ばった顔。彼にはノアは一族を消し去った悪でしかない。その人物が、温情などとはとても信じたくない。信じれる筈がない。 그레이は固く口を結ぶ。

その様子にジャレットは気づき頭を軽く掻く。

「やるべき事があるんだろう？ 今はそれだけを考えるんだな」

彼の助言は正しい。協道にそれる時間など無いのに。その名を聞くとも感情的になってしまう。ここに上官がいたなら、同じ事を言ったのだろう。任務に集中しろと。

いつしか警戒心は興味へと変わっていた。軍の事、魔族の事、彼は良く知っている。絶対に解決しなければならない。その一心で話をした。今朝の写真と一緒に、全てを。

ジャレットは、少年の写った写真をまじまじと見つめて言った。

答えは期待も虚しく知らない子だと。この様な奥の人が滅多に通らない場所で神獣と二人細々と暮らす彼が、知らないのは当然だろう。神隠しを知っているだけでも、話はしやすい。

「黒死蝶とは穏やかじゃないな。ヴォルドア卿とは相手も悪い。

魔族の匂いがすると、レディは言っていたが……」

「魔族ですか？」

「ああ。ここ数ヶ月前に、あの辺を歩いた時にな、そう言ったんだ。それ以来外に出るのを嫌がって……」

「どうして放って」

「ディオ！」

그레이に止められ、ディオははっと口を噤む。

「……俺に当時の力があれば、どうにかしようとしていたのだろう

が　もうそんな力はない。今の俺は普通の人と何ら変わらない」
おもむろに分厚い服を脱ぎ、鍛え抜かれた体を見せた。無数の傷よりも目立つ胸の封印呪が、彼の証言を嘘ではないと示した。一切の能力を永遠に封じる呪縛。黒く浮かぶ逆十字が胸の中央にくつきりと。

「すいませんでした……」

ディオは軽率に口走った事を謝った。

「気にする事は無い、これも承知の上で犯した罪だ。俺は、こうやって話を聞く事は出来るが、直接の接触は難しい。ただでさえ神軍堕ちは肩身が狭い。目立つた行動は控えなければならぬ」

すっかり膝で寝息を立てるレディへ彼は優しい眼差しを向ける。
ひっそりと暮らしていくだけでも、罪を犯した者にとっては平穏で手放しがたい事なのだ。彼には迫害が付きまとうのだろう。ディオにはその辛さが良く分かる。

「大丈夫です。僕達に任せて下さい」

「それは心強いが、油断はするな。何も分からないまま突っ走っては、返り討ちにあうだけだ。まずは、魔族の関与を明らかにし階級次第では軍に応援を頼んだ方がいい」

ジャレットは彼等が初めての任務であるのを知った上で、そう言った。無理をしかねないまだ若い彼等。過信と限界を知り、時には頼ることも必要だと諭す。

「……分かりました。ありがとうございます。魔族の情報を頂けただけでも大きな進歩です」

そう言ったディオの声音が若干だが震えていた。飲み終えたカップを床に置き、 그레이を見やる。

「ジャレットさん、ありがとうございます。それと珈琲ご馳走様でした。搜索もあるので、今日は失礼致します」

「ああ、気を付けて。くれぐれも無茶はするなよ。なんかあったら、話は聞いてやる」

「はい」

力強い返事を残し、二人は彼の家を後にした。魔族が居るとい
う大きな情報を手に、再び写真の子の手掛かりを追う。

何時間もの間歩き回る。どこの家の人も神軍に対しては好意的だ
ったが、やはり何の情報も得られない。神隠しと言うだけあって、
忽然と人が消える。それは、足取りも全てを拭い去り存在すら無い
ように感じる。やはり、これは魔族の仕業で間違い無いのだろうか。
黒死蝶の出現も相成つて、ますますこの邸が怪しい。

写真を握り締めた手が、呼び鈴を押すのを躊躇う。

「デイト？」

「この写真を見てもらっただけなのにね」

黒に近い灰。

この邸に何かあるのは間違い無い。だから、平常でいられるかが
心配だった。黒死蝶について問いただしい気持ちは大きく、抑え
る事が出来るだろうか。彼の心中は犠牲者を思い穏やかではない。

「君が聞いている間、中の様子を探ってみる。少しの間で良い、何
か得られるかもしれないから」

真っ直ぐな視線をグレイはデイトへ向けた。デイトが写真の子を
聞いている間に、グレイは木々や動物達に話しかける。動物が居る
かも中に入った事が無いから分からないが、やってみる価値はある
と言った。そこで反応があれば、もしくは魔族の事や被害者の事が
分かるかもしれない。精麗ともいえず、こちらからの言葉に、彼等
が必ず返事をするとは言い切れないが、無闇に突っ込めない以上や
るしかない。

こういう時自分が精麗である事存在理由を見いだせる。どの種
族にも無い能力が役立てられる。

「うん。それじゃ」

焦る鼓動が大きな音を立てる。呼び鈴を鳴らした手を引っ込め、
鉄格子の門が開くのを待った。

それにしても、大きな邸だ。雪を被った庭の先には邸の扉がある。
ここからでは、大きな声

出しても届かない距離。横に広がりを見せる邸は二階建てで、客室の大きさが伺える。数えても、窓は左右四つつ有る。邸の大きさは力の強さを象徴する。ヴォルドア卿が、この国でどれだけの影響力があるかを示さんばかりに、圧倒的な威圧感を二人に与えた。

格子の中を眺めていると、邸の扉が開き中から執事が現れこちらへ向かって来る。珍しい毛色

だ。濃い紫の髪はサラサラと耳元で揺れ、右に流された前髪の下にある瞳は鮮やかな緑。背は高く細身な体。魅入られる。

「神軍の方でいらつしゃいますね。どうぞ中へ」

格子の開く音をかき消す程に、深く耳に入り込む声が低く響く。

「あー い、いえ。この子を見たことがあるか聞きたいだけですの
で、聞いていただけませんか？」

デイオは現れた執事へ写真を手渡した。受け取った写真を数秒眺め、執事は「では、聞いてま

いります」と言い残し邸へ戻っていった。

「綺麗な人」

「そうだね。耀翼かな」

「それで、どう？ 何か聞こえた？」

「嫌、まだ何も」

「そうか……」

戻ってくる間に交わされた会話。 그레이の問いかけに、未だ反応は無い。

「お待たせ致しました。ご主人様より、この件も含めて現状を知りたい。との事。どうぞ、中へお入りください」

意外な展開に、二人は顔を見合わせた。中に入れるのは願ってもないチャンス。そう簡単にボ

口を出すとは思えないが。

「分かりました」

「どうぞ、こちらへ」

逃げて。

グレイの耳に飛び込んだ声。危険を暗示させる言葉を聞き取った矢先、振り返った彼の目の前で、格子の門は重く閉ざされた。

招き入れられた邸の一室。広さがある割には隅々まで暖房で暖かく、窓からは問が見える。染めた毛で花を散りばめた絨毯の上には、揺れる木の椅子。それと近くには客人用のソファ―。この主人は、会った時と同じ格好同じ微笑みで、グレイとディオを歓迎した。

「寒さには慣れたかな？ 毎日、本当に頑張っているね。ありがとう」

第一声は優しく気遣う言葉。

それから、外套を執事へ預け勧められるままソファ―へ座る。監視されている気分と、この先の展開が読めず萎縮してしまう。事グレイに関しては、逃げて。という言葉が頭に引っかかり、疑心に満ちる。

「まあ、そんなに固くならず。それで成果はあがっているのかい？」
柔らかな視線ですら、鋭く見透かしているようだ。

「……いえ、今のところ何も。すみません」

「そうか。私の方も、すまないね写真の子に心当たりは無くて。他にも何か手伝える事があるなら何でも言ってくれ。国民も怯えてしまっているからね」

腹の中が読めない。

こうして穏やかな口調と眼差しを目の前にすると、それが真意であるようにも見えるのが怖い。

「はい。頑張ります」

「ところで、今日は二人だけなのかい？ 後の二人は？」

「別の所を回っています。その方が効率がいいので」

「そうか　 그레이君とか言ったね？　君はもしかして精麗かな？」
微笑むヴォルドア卿の視線が 그레이を舐めるように見ている。物
珍しい、秘宝でも眺めてい
るように瞳を輝かせ。

「……そうですが」

目線を外し、 그레이は返答する。

「ああ、すまない。この目で精麗を見るのは初めてでね、つい。し
かし、儂い美しさだな。触
れたら消えてしまいそうだが　　神軍とは素晴らしい。消え入る美
しさに強さが備わった。希
少性もある」

いきなり変わった流れ。ヴォルドア卿が何を言いたいのか、二人
には理解できなかった。

「あの、僕が精麗ではいけませんか？」

「いや、そうではないのだ。むしろ私としては光栄に思っているよ。
それに、隣の君も。綺麗な

色の瞳をしている。耳の形は 그레이君と違って丸いね、地人かな？」

「……そうです」

「ふむ　興味深いな。君達は実に可愛い」

「お褒めに預かり光栄です……」

何か不気味なものを感じた。褒められているのに素直に受け止め
られない。目を背けたくなる

視線が苦しい。何かが変だ。そう違和感を感じた時にはもう遅かつ
た。

突然の眩暈。ぐらりと視界が揺れ、二人は意識を手放した。

ソファーに倒れ込むディオと 그레이を、ヴォルドア卿は満足気に
見下ろしていた。

「ふふつ。素晴らしい逸材だ。まさに理想の楽園に相応しい。耀翼
が居ないのが残念だが、彼等が居なくなれば出てくるしかあるまい」

くすくすと笑いながら、ヴォルドア卿はグレイの金糸の髪を撫でた。

「お前の邪香は良く効くな。それにしても、やはり美しいな精麗は直ぐに箱庭に入れてしまうのは惜しい。そうだな、二人共たつぷりと可愛がつてあげよう。レスト、二人を私の部屋へ。拘束するのも忘れるな。それと、残りの者は始末して構わん。女に興味は無いからな。」

「かしこまりました」

執事は顔色一つ変えず、軽々と両肩に二人を乗せて部屋を出る。

「レストには神軍といえど敵うまい。楽しみだな」

ヴォルドア卿は薄気味悪い笑みを浮かべた。つい先ほどまでの優しさは消え、どす黒い闇に似た微笑みを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3305ba/>

この空が灰色に染まる頃（仮）

2012年1月8日20時46分発行